

令和3年度普及活動外部評価 報告書

令和4年3月
長野県農政部農業技術課

県下10か所の農業農村支援センター（以下、支援センター）では、「しあわせ信州創造プラン2.0」及び「第3期長野県食と農業農村振興計画」に基づき、長野県農業と地域の発展を目指して、農業の生産性や収益性を向上させるための技術指導、担い手の確保、育成などの業務を行っています。これらの業務を効果的かつ効率的に展開するため、県では支援センターの活動について、外部からの幅広い視点で客観的な評価を行い、その結果を今後の活動に活かしています。

本年度は様々な分野で活躍される5名に依頼し、上田、木曾、松本、北アルプスの4支援センターを対象に外部評価を実施しました。

今後、外部有識者から提言いただいたご意見等を、県下全ての支援センターの今後の業務に反映させ、目標の達成に向けて活動の充実を図っていきます。

1 外部有識者

（五十音順・敬称略）

所属	役職	氏名
J A全農長野生産振興部	部長	岩崎 直樹
信州大学農学部	教授	春日 重光
中棚荘	女将	富岡 洋子
有限会社宮城商店	専務取締役	宮城 恵美子
株式会社ベジーツ	代表取締役社長	山本 裕之

2 開催日時、評価対象等

支援センター	実施日	説明事項・評価課題		
		共通	重点課題	特徴的な普及活動
上田	9月14日	地域の農業及び普及活動の概要	ブロッコリーの生産安定と出荷期の長期化等による産地力の強化	消費者に信頼される農産物直売所を目指した支援活動
木曾	9月6日		御嶽はくさい産地の再構築	定年帰農者等の確保育成
松本	10月12日		りんご高密度植栽培の推進支援	水稲後継者グループ「安曇野.come」の活動支援
北アルプス	10月19日		北アルプス地域を支えるトッランナーの育成	大北産米の「ブランド力」「収益力」のアップ

3 支援センター重点活動課題の総合評価

支援センター	課題名	総合評価※
上田	ブロッコリーの生産安定と出荷期の長期化等による産地力の強化	3.7
木曾	御嶽はくさい産地の再構築	3.3
松本	りんご高密度植栽培の推進支援	4.0
北アルプス	北アルプス地域を支えるトップランナーの育成	4.0

※ 総合評価は、出席委員の平均値

[評価基準と判定区分]

- 5：目標以上の成果が認められる。
- 4：目標どおりの成果が認められる。
- 3：活動は十分に認められるが、成果はやや不十分。更なる活動展開を期待したい。
- 2：成果が認められないが、活動展開の糸口は見えている。
- 1：活動が不十分で成果が認められない。

4 外部有識者からの意見、提案等を踏まえた今後の対応

(1) 上田農業農村支援センター

ア ブロッコリーの生産安定と出荷期の長期化等による産地力の強化

外部有識者評価（意見、提案等含む）	今後の対応
<p>ブロッコリーを課題設定したことは栽培適地であり、指定品目であり、ニーズも高いため、よいと思う。今後は指定品目として守っていただくだけでなく、生産拡大にむけての戦術等攻めの姿勢も必要ではないか。</p>	<p>ブロッコリーは管内の主要品目であるため、今後とも関係機関と連携しながら新規栽培者の確保、夏期の生産安定など生産拡大に向けて取り組んでまいります。</p> <p>特に新規栽培者の確保については、新規就農者を対象とした新規就農者支援セミナーの中で、新たにブロッコリーを対象品目に加えた「野菜コース」を開設し、後継者育成に努めてまいります。</p>
<p>産地力の強化がテーマであるため、産地全体としてどんな姿にするのか、もう少し踏み込んだ目標設定が必要ではないか。</p>	<p>普及活動計画の活動成果目標として、令和2年度は「栽培面積・生産量」を、令和3年度にはこれに加え、「べたがけ資材取り組み数」と「新規栽培者数」を設定しています。</p> <p>令和4年度普及活動計画には、更にブロッコリーの産地として強化が図られるように、べた掛け導入面積、新規ブロッコリー導入者数等具体的な目標を設定し活動してまいります。</p>
<p>被覆による収穫の前進化や病害防除のタイミングなど成果と考察は整理されており、波及効果は見込めると思う。これらの技術導入によって反収がどのくらい増加するのか生産者に示すことが必要ではないか。</p>	<p>本年、被覆栽培の反収や経済的効果等の詳細な調査を行ったところ、反収、品質、所得ともに優位であることが分かりましたので、これらのデータを整理し、より一層被覆栽培が普及するための生産者向けチラシを改訂してまいります。</p> <p>病害虫の防除タイミングによる防除効果等については、次年の課題として調査ほを設けるなどして、取り組んでまいります。</p>
<p>コロナ禍の現在では難しい部分もあるが、友人、親類といった目線で、農業者に寄り添った指導をしてほしい。</p>	<p>今後も新規就農者は重点対象者と位置付け、個別巡回等により重点的に指導を行ってまいります。</p> <p>また、支援センター主催の新規就農者支援セミナーへの参加を働きかけ、併せて新規就農者同士の仲間づくりにも努めてまいります。</p>
<p>農業初心者に対する指導はデータ共有、紙媒体での資料配布は必須だが、先輩農業者から学ぶ機会を作してほしい。</p>	<p>新規就農者にとって先輩農業者から学ぶ機会はとても重要なことです。</p> <p>上田地域には各地域に農業青年クラブがありますので、地元の農業青年クラブへの加入を勧めるとともに、青年クラブ員同士の情報交換等が積極的に行われることで、先輩農業者から学ぶ機会が得られるよう支援してまいります。</p>

<p>指定品目であるブロッコリーを、直売所のメインの場所でレシピなども付けて販売するよう仕向けるなど、地域密着型の農業を目指してほしい。</p>	<p>地域密着型の農業は、地消地産を推進する上でとても重要です。 御提案いただいた、直売所でブロッコリーのレシピを紹介する取り組みについては、令和4年度の普及活動計画に新たに位置付け推進してまいります。</p>
--	---

イ 支援センター総括所見等

外部有識者評価（意見、提案等含む）	今後の対応
<p>上田地域は近年、生産力が低下しシェアも落ちてきているため、今一度農業振興と産出額の回復に向け、多様な担い手への生産提案等、JAグループや行政と連携して進めてほしい。</p>	<p>上田地域は担い手の減少等により産出額が減少傾向です。これには、担い手の確保・育成や農地の集積等への取り組み等が重要ですので、今後もJA・市町村等関係機関と連携を密にし、人農地プランの実質化や定年帰農者を含めた新規就農者の確保・育成を進めてまいります。 また、新技術や新品目・新作型の導入を支援してまいります。</p>
<p>生産者には指導会等において分かりやすくポイントを押さえた資料作成と説明をお願いしたい。また、農家やJA技術員のところへ可能な限り足を運んでほしい。</p>	<p>指導対象農家には、農業の知識・経験が少ない方もいますので、今後も作成する資料は理解しやすいものを作成し、また丁寧な説明を心掛けてまいります。 また、可能な限り農家やJA技術員のところには足を運び、農家に寄り添った支援となるよう取り組んでまいります。</p>
<p>若い人に農業体験を通じ、農業への関心度を高める活動を行ってほしい。</p>	<p>幼い時から農業に関心を持ってもらうため、小学生を対象とした、「じゃがいも」の収穫体験や花育出前講座などを関係機関と連携し開催しています。 今後も農業への理解が深まるよう、農業に接する体験学習に取り組んでまいります。</p>
<p>直売所の存在は年々大きなものになっているため、その活性化に取り組んだことは注目される。消費者に求められる商品の生産、新たな作物のチャレンジによる消費の掘り起こしなど、JAや生産者グループと連携して進めてほしい。</p>	<p>本年度から出荷農産物の端境期対策のため、直売所と連携しながら、葉物野菜の試作、盆・彼岸の需要期に向けたキクの導入等の取り組みを開始しました。 今後も関係機関との連携を更に強め、魅力ある農産物が揃う直売所を提案してまいります。</p>
<p>直売所の日々の販売量等をデータ化し、農業者がブロッコリーなどを直売所へ出荷する際に過不足の出ないような取り組みを進めてほしい。</p>	<p>それぞれの直売所では出荷データの記録や整理を行い、メール等を活用して出荷者に農産物の不足情報を連日発信しています。時期によっては不足が生じていますので、優良事例等の情報提供や直売所間の情報交換を通じて過不足の解消につなげてまいります。</p>

<p>直売所におけるSNSの発信はとてもよいと思う。商品の変動なども発信してはどうか。コロナ禍でも定期的に情報発信することが大切と思う。</p>	<p>SNSはチラシと並んで重要なツールで、特に若年層への働き掛けに有効と認識しております。直売所運営者を対象にしたセミナー等で活用を働き掛けてまいります。</p>
<p>直売所商品の季節変動で、棚の空きが出るような場合は、農産加工品を置くことはできないか。</p>	<p>地元の加工品を販売している直売所は、加工施設や加工組合を持っている一部の直売所に限られています。ご指摘のとおり、加工品は大変重要な商品と考えるので、地域特産品を活用した新たな加工品開発も含めて取組んでまいります。</p>

(2) 木曾農業農村支援センター
ア 御嶽はくさい産地の再構築

外部有識者評価（意見、提案等含む）	今後の対応
<p>産地支援プロジェクトチームが立ち上がったことは評価できる。今後はプロジェクトチームの活動内容の充実を図ってほしい。</p>	<p>産地支援プロジェクトチームが立ち上がったことにより、年度当初に掲げた重点課題の進捗管理をJA、町村関係者で行う体制ができ、都度相談しながら、活動内容の充実を図ってまいりました。</p> <p>令和4年3月には生産者、関係機関とともに、3年間実施してきた当重点活動の評価、反省の総括を行い、次年度へ向けた活動内容の充実を図っていく予定です。</p>
<p>産地の持続性にかかる連作障害対策や輪作体系といった提案が必要ではないか。</p>	<p>当地域のはくさい栽培は、年1作でそばや飼料作物などとの輪作体系が確立されており、他産地で問題となっている根こぶ病の発生なども現状見られておりません。</p> <p>今後も引き続き、連作障害を未然に防ぐため、輪作などの対策を徹底するとともに、重要病害であるハクサイ炭疽病の発生予察や将来に向けたハクサイ収穫機の実演など新たな提案を行ってまいります。</p>
<p>若手農業者が希望を持てるよう、はくさい生産の採算性など具体的な経営指標を示してほしい。</p>	<p>木曾地域では、「御嶽はくさい」の作付けが短期間にならざるを得ないというハンディがあるため、品質に重きを置いた丁寧な栽培管理を徹底し、販売単価を維持しています。</p> <p>また、大半の農業者は冬期間地元スキー場などに就業して所得確保を図っているのが実態で、就農を希望される方へは、それらを十分ご理解いただいたうえで、経営指標を提示し、相談活動にあたっています。今後も木曾ならではの魅力も併せて発信しながら、新規就農者確保に努めてまいります。</p>
<p>成果目標の数値の根拠やなぜこの目標なのかを具体的に示してほしい。</p>	<p>成果目標については、生産者を交えた産地支援プロジェクト会議で議論を重ね、JAが長年信頼関係を構築している中京、関西市場へアンケートをとる中で得られた期待出荷数量を目標値として設定しました。</p> <p>また、単収やL級比率についても同様に、過去の実績数値を基に、生産者、JAと議論を重ねた上で設定しています。</p>

<p>「御嶽はくさい」を使った「木曾」という知名度を活かした商品化を検討してはどうか。</p>	<p>50年以上の歴史を持つ「御嶽はくさい」は、1994年この名前で当時の木曾農協野菜生産部会が商標登録し、市場から高い評価をいただいています。一部には「御嶽はくさい」を使ったキムチなどがありますが、ご意見は今後、関係者等と検討してまいります。</p>
<p>はくさいをどのようなお客様にお届けしたいのか、最終消費者をイメージできるといいと思う。</p>	<p>現在はJAが長年信頼関係を構築している中京、関西市場の期待出荷数量を確保することに精一杯な状況で、地元の一般家庭にはなかなか届かないのが実情です。</p> <p>今後もJA、生産者が行う市場視察などを通じ、実需者との情報交換を行って生産体制に反映させるとともに、地元直売所への販売も検討してまいります。</p>

イ 支援センター総括所見等

外部有識者評価（意見、提案等含む）	今後の対応
<p>農家と常に連携している様子は大いに評価する。生産した物が消費者にどのように評価されているか実感する場も大事だと思う。</p>	<p>自分で生産した農産物が実需者や消費者にどう評価されているのかをつかむことは重要なことと考えます。</p> <p>今後も実需者や消費者の皆様に木曾地域農産物の価値を理解していただけるよう、JA、町村等と連携を図りながら普及活動を進めてまいります。</p>
<p>農業入門講座の開催はすばらしい。例えば全カリキュラムを受講した人には、特典として「御嶽はくさいをプレゼントする」とか「応援資金を支給する」といったユニークな試みがあっても、おもしろいのではないか。</p>	<p>対象者が興味を持ち、魅力を感じる内容は重要と考えます。今後も多様な農業者を対象に、受講者が魅力を感じる講座運営を関係機関と連携して進めてまいります。</p>
<p>農業入門講座による定年帰農者の確保について、今後も行政と連携し、優遇措置を実施するなどして着実に増やして行ってほしい。さらにJAなどと連携し、販売の勉強会などを計画し、自然豊かな木曾の付加価値を認識し、ブランド化すると良いと思う。</p>	<p>地域農業維持のために、定年帰農者の確保は重要と考えますので、今後も関係機関と連携し、魅力ある講座運営を進めてまいります。</p> <p>また、販売にあたってはJAと連携した木曾のブランド価値を高める取組に努めてまいります。</p>
<p>貴センターの取組が、1次産業就業者の激減を食い止める成功事例となるよう期待している。</p>	<p>今後も木曾地域の主要品目である御嶽はくさいの生産振興、農業入門講座開催などを通じ、関係機関と課題を共有しながら、継続的な産地の維持発展に寄与できるよう普及活動を進めてまいります。</p>

(3) 松本農業農村支援センター
ア りんご高密度植栽培の推進支援

外部有識者評価（意見、提案等含む）	今後の対応
<p>課題に基づいた成果目標の設定がされているが、反収や省力化の検証について、データ収集だけでなく、具体的な目標設定が必要ではないか。</p>	<p>県果樹試験場の研究では、主要品種の「ふじ」主体に、単収5t、あら摘果の時間が3割削減できる等の指標があります。それを参考に、現地で要望の多い県オリジナル品種「シナノスイート」、「シナノリップ」の実態調査を行いました。今後は、得られたデータに基づき、具体的な目標設定を行ってまいります。</p>
<p>高密度植栽培への可能性は大いに感じる事ができたが、導入コストが高いなどの課題を踏まえた上で今後の見通しはどうか。</p>	<p>高密度植栽培導入のための初期コストはかかりますが、国の果樹経営支援対策事業でかなりの部分を賄うことができます。本事業は継続予定であるため、今後も事業の一層のPRと連動させれば、導入は増えると見込んでいます。</p>
<p>栽培年数が経過しても安定した収量が維持できるかや省力化技術について、まだ検討の余地があると思うため、多様な生産者が前向きに取り組む事ができるよう、技術の検証と確立を今後も進めてほしい。</p>	<p>3年間の活動により、「シナノスイート」、「シナノリップ」について、定植後4年目までの収量推移を把握できました。省力的な着果管理は、調査年に凍霜害に見舞われ、十分なデータが得られませんでした。今後も、県果樹試験場の研究成果も参考にしながら、より多くの生産者が取り組むことができるよう技術の検証と確立を現地段階で進めてまいります。</p>
<p>モデル農家の取組経過や成果を数値などにより見える化し、経営設計を描くことにより新規就農者が取り組みやすくなるのではないか。</p>	<p>令和2年度にモデル農家5件を取材し、「りんご高密度植栽培先進取組事例集」をとりまとめ、管内JA部会員に全戸配布しました。今後は、親元就農者、新規参入者の双方に対し、事例集を参考として経営設計に活用してまいります。</p>
<p>成果目標について、今年や来年の目標だけでなく、5年後、10年後さらに先を見据えた視点が必要ではないか。 また、高密度植栽培はりんご栽培の1手法であるため、りんご産地全体を見渡し、産地維持を図っていくことが必要ではないか。</p>	<p>ご指摘のとおり、高密度植栽培は産地維持のための1手法です。管内は高密度植栽培を導入できる条件の揃っている地域が多く、そこにおいては産地維持のための有効な手段であると考えています。 松本地域は県下でも有数のりんご産地であり、令和4年度からは、産地のステップアップに向け、担い手の確保育成に主眼を置いた重点活動課題に取り組みます。この活動の中で、先を見据えた目標を新たに定めてまいります。</p>

イ 支援センター総括所見等

外部有識者評価（意見、提案等含む）	今後の対応
<p>水稲若手生産者組織である「安曇野.come」の活動支援については、農家との距離感が適切であり、同じ思いの意欲ある若手農業者が数人で動くと、地域農業の発展に結びつくよい例であると感じた。</p> <p>今後は水稲経営体に取り組む複合経営も含めた多岐に渡る課題への柔軟な対応と、引き続き若手農業者への支援をお願いしたい。</p>	<p>「安曇野.come」に対しては引き続き、メンバーの自主性を尊重しながら、関係機関と役割分担して支援してまいります。また、この活動支援で培った知見を、管内の他の担い手組織育成にも活用してまいります。</p> <p>複合経営については、地域で推進している品目を主体に情報提供し、個別の経営実態に応じた提案を行ってまいります。</p>
<p>松本地域は県下でも有数の農作物地帯で、米、果実、野菜など重要な位置づけとなっているため、規模拡大に向けた省力技術の普及やスマート農業の拡大、労働力支援対策など、課題解決に向けた取り組みを引き続きお願いしたい。</p>	<p>省力技術、スマート農業については、国も県も新たな事業を展開予定であり、管内でも事業実施を検討してまいります。普及組織としてもそれらを活用し、事業実施主体と協力しながら、様々な課題の解決を図ってまいります。</p> <p>また、労働力支援対策については、ハローワークと連携した取り組み等が始まっており、引き続き実施してまいります。</p>

(4) 北アルプス農業農村支援センター

ア 北アルプス地域を支えるトップランナーの育成

外部有識者評価（意見、提案等含む）	今後の対応
<p>各トップランナーの経営状況や課題・改善目標はどの程度明らかになっているのか。もう少し具体的に教えてほしい。</p>	<p>今回は2経営体の事例を説明しましたが、全体では対象7経営体・33課題があり、そのうち12課題で成果がみられ、17課題が継続中、3課題は短期間での解決が難しい状況です。 今後も各トップランナーの経営状況に応じ、課題解決にむけた支援を行ってまいります。</p>
<p>周囲の農家への波及効果はどれくらいあるのか。</p>	<p>2年経過した時点では周辺農家への波及効果はほとんど認められませんが、今後は3年間の取組成果を市町村やJAと共有し、トップランナーを目指す他の経営体への提案等に活用し、担い手育成を進めてまいります。</p>
<p>経営改善に関する活動・事例は有効であると思うため、長野県の他地域にも横展開してほしい。</p>	<p>重点対象農家の個別課題を、栽培技術、農場管理、経営管理、労務管理の区分に整理し、同様な課題を抱える他の経営体への支援手法として取りまとめるとともに、農業技術課専門技術員とも情報共有し、今後、他地域で取組む際の参考にしていきます。</p>

イ 支援センター総括所見等

外部有識者評価（意見、提案等含む）	今後の対応
<p>大北産米のブランド力アップについて、斑点米カメムシ類の発生消長と適期防除のタイミングを解明できたことは大きな成果であったと思う。今後も品質確保や省力化、コスト削減による収益力向上に向け、技術開発や改善に期待する。</p>	<p>地域の主要品目である米については、実需者の信頼を損なわないよう、需要動向に即し、収量・品質共に満たせる産地を目指し、今後もJA等関係機関と連携して革新技術の導入や担い手育成に取り組んでまいります。</p>
<p>今後も米需給の緩和が続く中で、転作品目の収益性向上や園芸品目の拡大が求められるため、農業基盤維持のための課題解決に向けたさらなる取組に期待する。</p>	<p>水田農業の将来を展望する中で、米のみならず、需要の高い麦・大豆・そばの安定生産と単収向上を目指すとともに、高収益作物の導入拡大による産地強化に向けて、今後もJA等関係機関と連携して取り組んでまいります。</p>
<p>今後も地域農業を持続していくためには、たい肥等有機質資材の有効利用が重要であるため、農畜連携や地域内利用を進めてほしい。</p>	<p>管内の畜産農家は酪農4戸、肉用牛1戸、養豚7戸等となっており、それぞれで堆肥の製造や販売が行われています。これらの堆肥は、露地野菜農家で積極的に活用されている一方、水田では一部の特別栽培米生産農家に限られている状況です。 今後は持続的な農業生産を更に進めるため、健全な土づくりを基本とし、有機物の利用や資材を活用した生産活動の推進をJA等関係機関と連携して取り組んでまいります。</p>

<p>若手農業者への支援は費用対効果の高い活動であると思うため、引き続き、重点的な支援をお願いする。</p>	<p>地域農業の持続的な発展のためには、若手農業者への支援が重要と認識しております。</p> <p>今後も新規就農希望者及び就農者への相談指導や自主的な仲間づくり、学習の場や世代間をつなぐ交流の場づくりを通じて、若手農業者が地域に根付き、地域農業の持続的な発展が果たせるように関係機関と連携して取り組んでまいります。</p>
--	--

(5) 組織体制等 (県全体・全支援センター共通)

外部有識者評価 (意見、提案等含む)	今後の対応
若手職員の資質向上のため、先輩職員からの技術等の伝承を進めていくことが必要ではないか。	中間層の少ない職員体制の中、若手職員の育成は急務であると考えております。 農業技術課専門技術員等による研修や職場内OJT研修、現地活動への同行等により、先輩職員等から学ぶ機会をつくるよう努めています。今後も専門技術等の伝承が進むよう、若手職員に対する研修の充実を図ってまいります。
対象経営体の栽培技術と経営を並行して指導できる普及指導員の養成が必要ではないか。	若手職員が増える中、栽培技術の習得と同時に経営指導力の養成が必要と考えています。 今後も経験年数の浅い職員を対象とした研修や先輩職員に同行した経営相談など、指導力強化のための取組を進めてまいります。
スマートフォンなどICTを活用した効率的な普及活動について検討を望む。	令和元年・2年度に各支援センターへタブレット端末を配備しました。 普及職員が農業技術課専門技術員やJA営農技術員とタブレット端末を介してリアルタイムにつながることで、農業者への栽培指導などを迅速かつ効率的に進めてまいります。

5 その他の主な意見

(1) 上田農業農村支援センター

- ・重点活動課題の設定が的確で、今後、波及効果が期待される。
- ・地域の実態を的確につかみ、支援センター内及び関係機関と連携した取り組みができています。
- ・新規栽培者向けセミナーや現地検討会等を通じたプレゼンテーションスキルの更なる向上に期待している。

(2) 木曾農業農村支援センター

- ・少人数体制の中、JA等関係機関との課題共有、連携が十分とれている。
- ・農業入門講座による定年帰農者の確保・育成は効率的な手法であり、これを機に子供や孫が農業に触れ、若年層にも広がる可能性を感じた。
- ・農業者に寄り添った多方面での支援、提案を今後も期待している。

(3) 松本農業農村支援センター

- ・重点活動課題の設定が的確で、りんごの生産基盤維持のため精力的な推進が期待される。
- ・地域の核となる若手農業者グループとの信頼関係が築かれ、JA等関係機関との連携もとれている。
- ・先進地である海外に学ぶなど、これからも広い視野で活動を進めてほしい。
- ・水稻若手生産者組織である「安曇野.come」の自主性を尊重し、特定の農家に負担とならない仕組みとしたことが独特で持続性が高いと感じた。
- ・地域の若手農業者とつながりを持ち、悩みや要望をしっかりと捉え活動を行っている点が評価できる。

(4) 北アルプス農業農村支援センター

- ・水田農業を中心に中核的経営体の多い地域性を踏まえた課題設定となっている。
- ・主力である水稻経営体だけでなく、果樹や野菜の経営体もターゲットとした点が良い。
- ・チェックシートによる対象経営体の気づきを促した活動は着眼点が良い。
- ・水田農業の維持のため、担い手育成と技術対策の両面から活動を行い、JAや市町村など関係機関との連携も十分に行われている。